



20分の世界

平日の20分の世界はとても居心地が良い
周りの他人の会話もテレビの音も
誰かが歩いている靴のヒールの音も
すべてが消えて 私の体から遮断される

「20分の世界」とは 読書の時間のことだ

会社の昼休みの1時間
食堂でお弁当を食べ お手洗い場で化粧を直す
その合間を縫っての20分は私にとってオアシスのようだ

時計は見ない 忘れたことにする
本の紙に指が触った瞬間から
私はもう此処にはいないのだから

どうやら読書をしていると
本の内容がスラスラ頭に入ってくる日と
そうじゃない日があるらしい
“そうじゃない日”に当たってしまったときは
「どうして頭に入ってこないのか」を考える

自分で自分に聞いて教えてもらうのだ
それがまたとても面白いし楽しい

読書は私にとって精神状態を計る
一種のバロメーターのようなものかもしれない

だいたい読書を始めて20分経った頃に
私はまた此処に戻ってくる
どうやら私の体には いわゆる体内時計が潜んでいるようだ

本を閉じてしまったらそこで終わり
次の日の20分まで その本には触れない
だって 触れたらまた20分の世界が始まってしまうから

電子危機

ボクたちは最早ヒトではないようだ
心がない心臓を持って 常にロボットのように正確に時を刻むだけ

そこに感情を入れてはならない
そこにココロを生み出してはならない
そこに"自分"という色を作り出してはならない
ただ無機質に浸り 砂時計の一点を見つめるだけ

それでいい それだけで
ボクは考えない 何も

顔の横を横切る感情に光を与える必要はここにはない
水溜まりに映った笑顔は置いて行こう
手のひらを心臓に当てることはもうやめよう
あの日の帰り道の夕映えは過去のモノにしよう

涙の味すら分からなくなってしまったこの時代
これから僕のこの命は どこに向かって歩いていくのだろう

僕ハ誰ナンダロウ.....
僕ハ誰ナンダロウ.....

こんなに電子機器で溢れているこの世界で
これからのボクたちは

どうやって生きていけばいいのですか？

マニキュア

桜色のマニキュアを塗ると

どうしてだろう 無意識に胸が高鳴ります

それは単純に私が「女の心」を有難くもちやんと持ち合わせている

ぼんやりとした象徴の一つなのかもしれません

桜色のマニキュアは実にシンプルで妖艶だと思います

桜色はピンクのような愛らしさや可愛さだけではなく

夜桜のあの生々しくて妖艶な 奥深い艶やかさを持っているのでしょう

静かに桜色のマニキュアを爪に落としていきます

このとき あまり呼吸することを意識しません

とにかくただひたすらに桜色を爪に落とします

10本の指に桜色を落としたら

私は自分の指先に咲いた小さな桜たちを眺めます

その季節はずれの桜に私は満足して

まるで自分が花咲か爺さんにでもなったみたいに顔がほころびます

そして今も きっとこれからも誰に訊くわけでもなく私はそっと

ただそれを眺めて静かに問うのでしょう

「生まれたてのものはどうしてこんなに美しいのか」と

誰かに

傘は誰かに持ってもらいたいです

背中誰かに搔いてほしいです

2人以上のときは誰かに前を歩いてもらいたいです

人混みを歩くときは誰かによけてほしいです

焼き魚は誰かにほぐしてもらいたいです

玉ねぎは誰かに切ってほしいです

指輪は誰かにプレゼントされたいです

悲しいときは誰かに頭を撫でてもらいたいです

涙は誰かに拭ってほしいです

誰かに . . .

気づかないうちに 私は求めていたのです

私の心に生まれたモノ

この不完全な感情が生まれたのは
いつだったか もう思い出せません
私はそれまで ずっと
“与えられる側” の人間でした

手を引かれて歩いていた幼い頃から
ずっと ずっと
与えられることが当たり前だと
錯覚していた気がします

そんな私にも大切な人ができました
とてもかけがえのない人です

家族や友達の“好き” という次元とは
ちよつと違うかもしれません
ただその人のことが
とても大切だと 強く思ったのです

初めてその人と会ったときに
私の耳元で神様が
そつと囁いたような気がしました
「この人に与えなさい」と

それからなぜか私は逆に
“与えること” を考えませんでした
ただその人と一緒にいて
のんびりと時を刻んでいました

この感情はなんて言うのでしょうか

今まで触れたことがない
感じたことがない感情
私の心に生まれました

私は初めてその人のために
何かしてあげたいと思いました

その人の「ありがとう」を
聞いて生きていきたいと思いました
私も時間が許してくれる限り
“ありがとう”を贈りたいと思いました

これはきっと何十年後に
私とその人の命が終わっても
永遠に変わらない感情なのでしょう

これが初めて私の心に生まれたモノ

私が“与える側”に生まれた瞬間でした